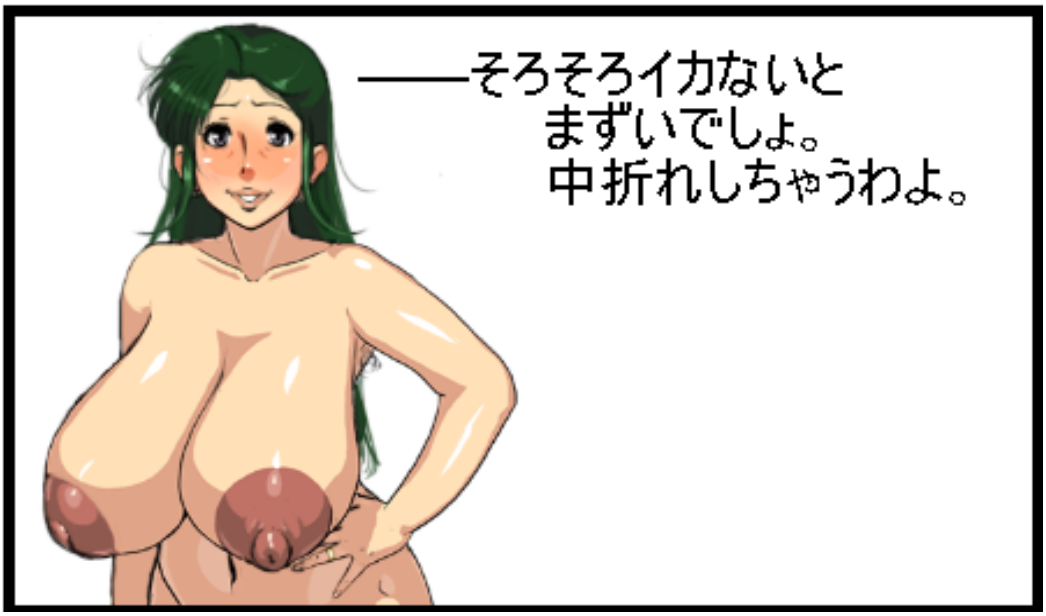
筆下ろし熟女子会

保険のセールスレディ保子さん（３５歳）編。
保子さんは今日も童貞に巨乳パイズリ

うさぎロボ　著

１章　義務感夫のギリマン日。

――そろそろイカないとまずいでしょ。中折れしちゃうわよ。



静まり返った住宅街。

サラリーマン向けの建売住宅が立ち並ぶ。

その一つが安田保子の家だった。

その寝室に並べられた大きな布団。

その片側に寄って、夫婦二人重なっている。

正常位で、その中でも横から見れば＞に近い形。

男が上半身を立てた状態といえる。

腕立ての両手を伸ばした形とも言える。

途中までそれでいって、盛り上がってきたら上体をあわせて抱き合ってーの形になり、フィニッシュするのが夫のやり方だった。

保子は夫の頭を撫でながら、真剣な顔で荒い息をつく夫を見ていた。

必死でピストンしている。

――ある意味、童貞みたいでいいけど……

しかし集中の意味が違う。

集中しないと萎えてしまうので、必死なのだ。

それがなんとなく伝わってくるので、保子は白けてしまう。

が、とりあえず喜んでいる顔を作る。

そんな大喜びするほど盛り上がっていないと思うので、そこそこの笑顔を。

腰を動かしながら、夫である康夫はちらりと妻の中途半端な笑みを見る。

――こんなギリマンで楽しんでくれてるんなら、結構な話だよな。

妻に飽きたのは結婚から数年後だった。

それから十年近く、夜の誘いをのらりくらりかわす技術を磨き、しかしあまりほうっても置けないので月一回のギリマンだけはやる。

セックスは愛人とするモノと割り切っていた。

保子は、年の割にはいい体をしていると康夫は思っている。

胸も大きいし、腹も太股もさほど肉はついていない。

昔は巨乳に一物を挟まれるのが楽しくて仕方がなかった。

――もう思い出せないな。

愛人の多少控えめな乳房の方がいいと今は思っている。肌の滑らかさも、若いだけに違う。

思えば愛人が出来てから、安心してセックスレスへの道を邁進できた。

流石に、いくら妻に飽きたといっても若い男がセックス抜きで、横に寝ている抱いていい女をスルーするのは難しい。

その辺、高卒ＯＬになってすぐ結婚し、今は保険の外交員というさほど社会経験がない妻は気づいていないと思っていた。

「う、で、でる」

「私もいくわっ」

義理で頑張れば出せる男と違って、女は演技するしかない。

夫にしがみつき、目を硬くつぶって体を強張らせる。

――絶対浮気してるわよね。

思いつつ、声を上げる。

「あなたのおチ〇チ〇いいっ！　久しぶりだからっ……声でちゃうっ！」

腰を押し付け、絶頂に身を任せる夫の体が強張ったのがわかる。

――ちょっとは、気にしてるんでしょうね。ほったらかしにしてるの。

だから月一のギリマンは支給してくれるわけだ。

別に絶頂に達してはいない保子。

それでもある程度気持いいことはいいので、夫の絶頂に合わせてかつて慣れ親しんだ肉棒を締め付ける。

ギュウギュウと、握り潰すほどに締め付けられる。

足を広げ、腰に絡ませながら背中を反らせ、締める、締める。

「おおっ、ま、マ〇コ締まる……っ」

気持ちよさげな声を上げる康夫。

「いくわっ」

いいつつ、保子は内心ため息をつく。

――あなたは演技じゃないわよね。いいわね男の人は。

目をつぶり、鼻の下を伸ばして声を上げる夫を薄目で見る。

まあ、電気を消してしているのでよく見えないが、豆電球がついているので少しは見える。

しばらくして、出し終わった夫がぐったりと体を預けてくる。

夫は四十歳。

めっきり体力も衰えている。

それでも、多分浮気相手にならもう少し元気だろうと保子は思う。

証拠はないが、いるに決まっている。

結婚するまで、あれほどセックスしたがった夫なのだ。

いや、してからも数年は毎日やっていた。

それがある所から間隔があいた。

そしてまた、ある時からガクリと回数が減った。

はじめは体調でも悪いのかと思って遠まわしに聞いたりしたが、結局の所は月並みな話だ。

――私に飽きた。そして愛人ができた。それだけのことなのよね、多分。

腹が立つ、というより、気づいた当時は愕然とし、信じたくなかった。

悲しいというのもある、腹が立つというのもある。

だがそれ以上に、セックスの事が第一に頭に浮かんだ。

夫が離れたら、セックスできない。

女向けの風俗というのもあるのかもしれないが、知らないしとてもいけない。

夫との夜のことがなくなれば、それでその先の人生はセックス抜きになる。

散々セックスに慣らされ、受け入れ態勢万全の「人妻」にしておいて、手を引くなどとんでもない話と思った。

夫がごろりと横に体を横たえる。

大きく息をついている。

そんなにがんばってくれて、と少し労わりの気持ちもわく。

「今日は元気でよかったわ、おチ〇ポが」

「そういうなよ」

先月は中折れしてしまった。

それで謝って終了だ。

――中折れって本当にあるんだ、と感心したわ。

膣痙攣というのは、どうなのだろうと関係ないことを考える。

夫がごそごそと動く。

――こいつとやると、終わったらすぐ縮むからゴム取りやすくていいな。

縛って、枕もとのゴミ箱に入れる。

子供がいればもう少し隠すかもしれない、と思う康夫。

子供がいれば、もう少し夫婦仲が良かったのだろうか、とも思う。

――いや、盛り上がらないだけで、悪くはないんだよな俺たちも。

妻には悪いと思っていた。

浮気などできる人間ではない。

来月までまたセックス断ちの日々が始まるのだ。

悪いと思うが、必死で勃起させてへたる前に終わらせる義理のセックスは正直きつい。

元気な頃から、もうこの妻を抱くのはきつかったのだから。
布団に隙間が出来、裸で汗ばんだ体を冷ます。
保子が立ち上がったのだ。
布団はすぐに戻される。
「先にシャワー浴びるわよ」
裸の尻は肉付きがいい。歩くのにあわせ、プルンプルンと揺れる。
若いときより、肉桃の揺れは大きい気がする。
ブルンブルン、と言ってもいいかもしれない。
若いときからたっぷり肉がついていた乳房に匹敵するといえば怒られるだろう。
肉桃が離れていく。
昔ならもう一発しようとしがみついたかもしれない。
だが今は、一物は縮み上がって無反応だ。
保子の足取りは軽い。
気持ちよかったからか、とも思うが、痺れて動けない、などという話はまったくないのだとも。
――昔はかなり上手くいったときは、しばらくぐったりしてたのにな。
ギリマンではこんなものか、と思う。
月一回のそれで、よく我慢してくれていると感謝も感じる。
それでも、来月のそれが早くもうっとうしく面倒に思えるのだった。
こういう時は、若い愛人のことでも考えれば気が楽になる。
風呂に向かう保子。
途中で、表面がシールの安っぽい木の台のうえに置かれた充電器から携帯をとる。
メールが来ているので、ロックを解除して読む。
「五郎君か」
浮気相手、といっていいのだろうか。保険の勧誘先で引っ掛けた童貞青年だった。
もちろん、今は童貞ではない。
保子と頻繁に会うので、最近セックスに慣れてきた。
それは嬉しい反面、寂しくもあった。
五郎は二十少し。
女との事に自信をつけたら、いつまでも十歳上の女と付き合ってはいないだろう。
寂しい。
反面、夫との家庭を壊す気はない保子にとって、それは都合がよくもある。
筆下ろし熟女子会などを作って、童貞を狙って落とす理由もそこにあった。
普通の若い男と付き合うのは中々大変だろうし、出来たら出来たで終わりがない。
もともと選べるのに熟女を選択した男だ、中々別れないと想像される。
普通の若い男なら、落とせるのか疑問でさえある。
その点、童貞なら慣れていないので落としやすい、いま恋人がいないのも童貞であるから確定だ。
そして慣れて、普通の男になったら相応の相手を求めて巣立ってくれる。

上手くやれば若い男の初々しい美味しい時期だけ頂いて、飽きてきたところで後腐れなく別れられる。

あくまでも、次々落とせればの話だが、美味しい相手なのだ、童貞というのは。

――こんなところね。

メールの文面が出来上がる。

＜明日会いましょう。ちなみに、今日はギリマン日でした。今回はちゃんと最後までしてくれました。義務感はある夫です。

でもおチ〇ポは五郎君の方が大きいし、元気でも段違い。明日は期待しています、保子＞

夫に見られたら離婚どころか**殺人の切っ掛けになりかねない**気がするメールを送信する。

メールはもう一つ。

熟女子会からの物だった。

保子が縄張りにしている保険の勧誘地区に、童貞らしい若者がいるというもの。

「次郎くんか」

よくある名前だ。

いや、むしろいまどき珍しいだろうか。

もし本当に童貞で、上手く引っ掛けられたらかなり助かると思う保子。

――五郎くんがそろそろ巣立つかもしれないからね。次のおチ〇ポに乗り換える必要があるかもしれないものね。

女と付き合う自信が出たら、若い女に乗り換える。それが若い男の現実だ。

家庭を壊したくない熟女にとって、それは痛し痒しであった。

交代要員が現れたなら、痛しの部分が軽減される。

「次郎くんね……」

ファーストフード店でバイトをしている会員の情報。

店に来た男女の中で、一人それっぽいのがいたから会話を立ち聞きし、名前でＳＮＳを調べたら近くに住んでいるのがわかったという。

ファーストフード店などに勤めているだけに、若い人間と交流があり、そういうネット関連の知識もある仲間だった。

バイトの中で童貞を見るとさっさと食ってしまう。その上で仲間に情報を流す余裕がある、頼れる仲間。

新童貞の名は、後藤次郎。

年齢は二十少しだという。

二十過ぎの童貞、珍しくもないだろう。

――今は、年嵩の童貞は珍しくない。奥手だからって放っておいて童貞でいるに任せる……ってのは健全な社会じゃない気がするけど……まあ、私たちは助かるんだけど。

そしてまたロックをかけて充電器に置く。

先ほどよりさらに足取りも軽く、巨乳にブルンブルンと音を立てさせながら風呂場に向かう保子。

誰も見ていなくても自己主張の強い肉バレーボールだ。

「保子」
と、背後から声をかけられて振り返る。
夫が立っていた。全裸。まあまあの大きさの肉棒が反り立っていた。
すでにゴムが装着されている。
どういうつもりか、いわれないでも保子にはわかった。
――二回戦なんて珍しいわね。あと、この人のおチ〇ポ、このぐらいだったんだ。忘れてたわ。
ギリマンでは布団の中から試合開始なので、よく見えない。
月一回では、先ほど受け入れたばかりの女の部分も、はっきりどのぐらいだったか思い出せないぐらいだ。
ましてや、ろくに見ていない目のほうは、すっかり忘れて当然だろう。
「保子、もう一回やろう」
「あら、今日は本当に元気なのね」
微笑む。
内心、愛人のことでも考えていたのかと思う。
康夫は妻の頬に触れる。
――あいつのこと考えてたら立っちゃったから、ここはサービスさせてもらおう。
もう片方の手を、太股に伸ばす。ムニムニと肉付きがいい。
というより、年相応に太り始めている体。
元々乳房の圧倒的な肉付きに魅かれて好きになった。
まさにバレーボール二つというほどの、見事な巨乳だったのだ。
そういうオッパイ力があるのは、肉がつきやすい体質だから、というのもあるのだろう。
それがいま、多少裏目に出始めているのか。
「あん……」
ブルン、と肉バレーボールを揺らす保子。
康夫が、太股を撫でる速さを上げる。
――　一緒に歩くのは嫌だが、エロさは十分以上だな。
流石に保子も予想しない自分勝手なことを考える。
滑らかな肌を撫でているだけで、一物がさらに硬化する。
――よしよし、これで中折れはないな。
手を滑りあがらせる。
すでに、蜜が垂れてきている。
好きだった頃は甘く感じられたが、今はごく普通の透明な液体に過ぎない。
今は、と言っても、最後に舐めたのは結構前だ。
ギリマンでは、もっぱら手マンで濡らして突っ込む手筈になっている。
今も、舐める気はない。
――舐めてて萎えてきたらまずい。
太股についた蜜を指に擦り付ける。
「あっ」

甘い声。心臓をぞくりとさせる。無理してやろうとは思えないが、抱けなくはない程度ではあると評価する。
それでも、若い愛人がいればギリマンの形にしかならない。
あるいは、偶然立ったとき都合よく入れるか。
蜜がついた指で秘裂を撫でる。さらに蜜で一杯になる指を肉穴に滑り込ませる。
キスでもするように、チュっチュと音を立てて指に吸い付く肉穴。
締まりはいい。
柔らかな肉壁の裏に人の手が入っているのかと思うぐらい、締め付ける力がある。
さらに太い一物となれば、もっと溜まらない。
それでも、飽きてしまえば仕方ない。
名器というだけで抱き続けるほどの名器ではないと康夫は考えている。
ヌチュヌチュ音を立てて指を素早く出し入れする。
第一間接まで抜き、また押し込む。手首を回転させ、周りを満遍なく擦る。
蜜に体液がうつり、指がお茶でもかけたように温かい。
もらしているのかと思えるほどだ。も
ちろん違うとわかっていて、冗談で考えている。
「ああっ、やばい、それやばいわっ。立てなくなるっ」
素早い手マンに腰が引けてくる保子。しがみついてくる。
に、と笑ってそれを抱き返し、太股を抱え上げる康夫。
開いた秘裂に、一物を握って腰を進める。
背丈の差もあって、結構しゃがむようにして下から突きこむ形。
「おああああっ、は、入った……おチ〇ポ入ってきたっ。さっきと角度が違って、いいわ」
「一気に行くぞ」
昔ならもっと手マンで可愛がり、乳も揉んだだろう。
だがそこまでするのは、疲れる。
保子の背中を壁につけさせ、ピストンを始める。
ヌブヌブ、骨に響く営みの音。脚を抱え上げれば、深く刺さって前後に動いても抜けない。
深く突きこむ。
下げる、突きこむ。
立ったままやる形では、側面を擦ったり、回転するような細かい技は使えない。
だから楽でいいと康夫は思う。
「ああっ、お、奥に届いてる……」
どの辺が奥なのかなど考えることは多いが、康夫は何も考えない。
うれしい事を言われ、盛り上がってズンズン突きまくるだけだ。
引き、突く。
無理やり押し込むように、びっしょりヌレヌレの肉穴に挑みかかる。
「もっと奥まで行くぞ」
「うひっ、あひっ、き、来てっ、一番奥まで来てっ」

ぐいぐい、串刺しにしよう押し込む。

一気に引く。

自分の長さになれた四十男だ、抜けないギリギリまで一気に抜ける。

巧みな腰の振り――といってもまあ、立位で入れていればそう簡単に抜けないが。

後ろから見ると、みっともない中年男の尻が振られる姿だが、それと連動したものを受け入れている女にとってはそんな想像は頭の端にも浮かばない。

そしてまた思い切りつきこむ。腰の肉同士が衝突する音。

ヌチュ、と粘っこいものが縺れる音。

「んはっ！」

女の小豆が夫の腰にこすり付けられ、容赦なく押しつぶされるのに声を上げる。

思わず、腰を捻る保子。

「おほっ、いいわっ！」

――これが、一番いいのよね。クリ、ゴリゴリされるのが……

声が出てしまう。

今度は、一回戦と違ってあまり演技ではなかった。

いつも通り布団でギリマンとは、雰囲気が多少違う。

とはいえ、フェラもパイズリも求められず、相手も舐めることなくさっさと本番というのはやはり寂しいものだ。

――ちょっと慣れた童貞が一番楽しいわね。何でも試したがって……あ、なんか早くなってきた。

二回目であるのに、夫のピストンのピッチが上がるのが早い。

早送りで見ているAVのように、肩越しに見る夫の腰が素早く動くのが見えた。

――なんかさっさと切り上げようしてるわね。やっぱり余所の女のことでも考えて立ったから、ちゃっちゃと抜きにきただけね。

ちょっとその気になったのか、と思わないでもなかった。

だが結局は倦怠感丸出しの、惰性のセックスではないか。

これはやはり、愛人とのセックスに期待するしかないと思う保子。

――おチ〇ポも大きいしね。

「んんっ、うふっ、いい感じ、いい感じよっ」

また、演技の割合の高い嬌声を上げてみせる。

風呂場横の廊下で、中年夫婦のギリマン二回戦が続く。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？

一章は全然童貞筆おろしではありませんが、
こういう感じの表現でもっと濃厚なセックスが展開していきます。
それでは、よろしければ続きは製品版で。